

現代青年の友人関係に関する考察

著者	岡田 努
雑誌名	青年心理学研究
巻	519
ページ	43-55
発行年	1993-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/12344

現代青年の友人関係に関する考察

岡 田 努*

青年期は他の年代以上に、友人との関わりを希求し、自己の安定や成長に関連づけるとされてきた。青年期前期（中学生～高校生前期）においては、急激な心身発達や性衝動に伴う不安を軽減し、両親の規範から心理的に分離する際の新たな規範としての役割があると考えられている (Coleman (1980) ; 松井 (1990) ; Atwater (1992) など)。また青年期後期（高校生後期・大学生期）には、知的・情緒的成熟に伴いお互いの違いを受容しつつ、相手との信頼・自己開示・相手への忠誠に基づいた親密で有意義な友人関係が維持されていると考えられている (Atwater, 1992)。

しかし現代青年の友人関係には、これと異なる様相がしばしば指摘されている。栗原 (1989) は現代青年の友人関係に見られる様相として、自他を傷つけることやアイデンティティの問題を回避すること、友人を自分の内面に立ち入らせないこと、群れていることでの安心感に支えられていることなどを挙げ、これらはナルシシズム的で自己中心的な閉じられたやさしさであるとしている。

千石 (1985) は現代青年の特徴として、一人になることを極端に恐れ、群れの関係をとること、固い話題や問題を避けとりあえず楽しければよいと考えていること、互いに傷つけることを極端に恐れ相手から一步身を退いたところでしか関わろうとしないことなどを挙げている。千石は、青年自身がこうした状態に空しさを感じながら、集団の盛り上がりや皆で演じているとしている。

町沢 (1992) は、現代青年は、表面的人間関係がうまい青年と、他者との距離の取り方が分からず内にこもってしまう青年とに2極分化しつつあると述べている。とくに後者は、母子関係の密着によって対人関係のとりかたを学習しないまま成長

した結果であるとしている。

上野・福富・松井・加藤・上瀬・上田 (1992) は、高校生の対人関係において「皆と一緒にだと安心」などの項目に反応する“群れ志向”の高校生は、自己意識、自己愛が強く、身近な狭い世界を好む傾向があるとしている。

千石 (1991) の調査によると、現代青年は、「互いの心を打ち明け合う」という項目への肯定率が高い一方で「互いに相手に甘えすぎない」、「プライバシーに入らない」という項目への肯定率も高く、現代青年が相手と距離を置いた範囲でしか自分を打ち明けない傾向があるとしている。

菅原 (1989) も、群れ関係や互いに距離をおいた友人関係をとる青年が同時に「心をうちあけあう」という項目へも反応する傾向を指摘する。しかしこれは、現代青年の排他性や人間不信の現れではなく、相手と自分を別々の存在として認めつつ、同時に個人的で親密な友人関係を維持する能力を、順調に発達させている現れであるとしている。

岡田 (1991) は、大学生の友人関係の持ち方（深い関係拒否、躁的防衛の2尺度）、自分自身への内省（内省傾向、軽薄短小の2尺度）について調査を行った。その結果、躁的防衛傾向が高く友人との深い関わりを避ける群と、自己に対しての内省を避け楽しさを志向する群が見いだされた。しかし、調査対象中最も多かったのは、対人恐怖傾向が強く内省傾向の高い群であり、対人関係や内面の葛藤を回避することが現代青年の全体的傾向とは必ずしも言えない結果を見いだしている。

群れの友人関係は内面的な話題や真剣な議論よりも、活動中心で、内面化の少ない、遊び仲間の関わりに近い性質を持つと考えられる。Atwater (1992) は青年期前期までの表面的・活動中心の友

人関係が、青年期後期になると情緒的な親密さへ移行することを指摘している。このことからみて、群れの関係は、児童期から青年期前期での関わり方が、青年期に持ち越されているとみることもできる。石黒(1951)は小学生から中学生にかけての友人選択理由を調査した結果、より年齢の高い者ほど、物理的な近接や巧利的な理由よりも、相手との性格などが気になっているなど人格的な要因・理由を挙げるようになるとしている。また田中(1967)も、幼児期・児童期には相互的接近(住所や席が近い)の要因によって友人が選択されやすいのに対して、加齢に伴い「親切でやさしい」などの同情愛着や相手の学業・人格を尊重するといった尊敬共鳴の要因が増加するとしている。よって現代青年の友人関係、特に群れの関係が、発達の未熟な性質をもっているならば、功利的或いは近接の要因による友人選択が、群れ傾向を持つ青年においてとくに見られることが考えられる。

山田・安東・宮川・奥田(1987)；山田(1989)は新しい対人恐怖症の型として“ふれあい恐怖”が大学生世代に増加していることを指摘している。これは雑談や会食など対人関係が深まる場面に恐怖を感じ、形式的で表面的な関わりにとどまろうとするといった状態を呈する症状である。ふれあい恐怖は、従来の対人恐怖と異なり、人と人が知り合いになる場面(出会いの場面)ではなく、より関係が深まる場面(ふれあい場面)において困難を感じるとされている。また、従来の対人恐怖が青年期前期から中期に発症しやすいのに対し、ふれあい恐怖は青年期後期に発症しやすいこと、母子関係から分離できないケースが多く、母親や恋人などからの母性的援助によって対人的困難を乗り越えられることなどが指摘されている。またふれあい恐怖はさほど重篤な精神病理を持たない青年にも多く見られるとされており、一般青年においてもふれあい恐怖と共通する心性が見られることが推測される。またこうした特徴は、アニメなど無機質な趣味に没頭し、対人的には退却傾向を示す“おたく”と呼ばれる青年とも共通する面があると考えられる。“おたく”青年は、学校な

どの集団場面での適応困難、対人関係で距離をとるなどの特徴をもつと言われている(中森, 1989)。岡田(1992)はおたく青年の心性として外界や自己の内面と情緒的に関わることが脅威となるために、本来情緒的コミットが可能な領域においても、防衛的に無機的な関わりをするとしている。現代青年の特徴として指摘される、友人関係での希薄さは、こうした“ふれあい恐怖”或いは“おたく”傾向と共通した内容を有すると考えられる。よって対人関係に距離を置く青年ほどふれあい恐怖的特徴やおたく的特徴を示すものと考えられる。

方 法

尺度 以下に示す尺度を用い質問紙法による調査を行った。

- (1) 友人選択理由に関する項目：石黒(1951)であげられた選択理由をもとにした質問項目28項目に、“その他”“親しい友人はいない”を加えた30項目。
- (2) 友人関係様式に関する項目：東京都(1985)、千石(1991)、田中(1967)などを参考に友人との関わり方を記述したもの19項目。いずれの項目についても、最も親しい友人一人を想定し、あてはまる項目にいくつでも印をつけるよう指示した。
- (3) ふれあい恐怖状況についての質問：山田他(1987)・山田(1989)による、ふれあい恐怖の症状及びクライアントの陳述から、ふれあい恐怖的状态についての質問項目を作成した。また中島(1991)などを参考に“おたく”的対人行動についての質問項目を作成した。本研究ではこれらを併せて“ふれあい恐怖状況”に関する項目と称する。

(1)～(3)とも、提示された項目について被調査者自身にあてはまるものを選択する方式とした。

調査時期 1992年1月

一般教養(心理学)授業時間を用いた一斉施行。

調査対象 261名(男子138名, 女子123名)

新潟県内の4年生大学の教養部学生(おもに1年次)。

結 果

調査に用いた各項目に対する反応数を表1に

表1 調査項目での頻度

友人選択理由（分類は石黒（1951）による）
 教示：あなたにとって一番親しいと思う友達を想定して下さい。あなたはなぜその人と仲がよいのだと思いますか。
 下の選択肢のなかから当てはまるものに、いくつでも○をつけて下さい。

	男子(%)	女子(%)	全体(%)
I 環境・生活などの接近による			
1. 家庭環境の接近			
(1) 家が近いから	40 (28.99)	21 (17.07)	61 (23.37)
(2) 家族の知り合いだから	5 (3.62)	2 (1.63)	7 (2.68)
2. 学校環境			
(3) 学校での席や番号が近いから	19 (13.77)	20 (16.26)	39 (14.94)
(4) 出身学校が一緒だから	63 (45.65)	54 (43.90)	117 (44.83)
(5) 出身地が一緒だから	45 (32.61)	45 (36.59)	90 (34.48)
3. 日常生活の接近			
(6) 一緒に遊ぶことが多いから	96 (69.57)	67 (54.47)	163 (62.45)
(7) サークルやアルバイトなどが一緒だから	61 (44.20)	49 (39.84)	110 (42.15)
(8) 互いの家を行き来することが多いから	61 (44.20)	38 (30.89)	99 (37.93)
II 性格趣味などの類似によるもの			
4. 気が合う			
(9) 気が合うから	120 (86.96)	116 (94.31)	236 (90.42)
(10) 性格が似ているから	46 (33.33)	48 (39.02)	94 (36.02)
5. 趣味嗜好の一致			
(11) 趣味や興味が一致するから	63 (45.65)	56 (45.53)	119 (45.59)
6. 意見の一致			
(12) ものごとへの意見や考え方が一致するから	55 (39.86)	61 (49.59)	116 (44.44)
III 親和的感情によるもの			
7. 温和			
(13) 相手の性格がやさしいから	44 (31.88)	59 (47.97)	103 (39.46)
8. 親切			
(14) 相手の性格が親切だから	43 (31.16)	50 (40.65)	93 (35.63)
9. 快活			
(15) 相手の性格が元気だから	53 (38.41)	55 (44.72)	108 (41.38)
10. 好き・感じがよい			
(16) 相手の雰囲気が好きだから	80 (57.97)	78 (63.41)	158 (60.54)
11. 面白い			
(17) 面白い相手だから	76 (55.07)	70 (56.91)	146 (55.94)
IV 功利性に基づくもの			
12. 教えてくれる			
(18) 自分の短所やミスを教えてくれるから	57 (41.30)	58 (47.15)	115 (44.06)
13. 貸してくれる			
(19) 物を貸してくれるから	6 (4.35)	0 (0.00)	6 (2.30)
(20) 車に乗せてくれるから	7 (5.07)	1 (0.81)	8 (3.07)
14. ものをくれる・手伝ってくれる			
(21) 気前がいいから	10 (7.25)	3 (2.44)	13 (4.98)

②② 自分のすることを手伝ってくれるから	29 (21.01)	13 (10.57)	42 (16.09)
②③ 自分の言う通りにしてくれるから	3 (2.17)	1 (0.81)	4 (1.53)
V 相手の優越性を理由とするもの			
15. 学業知能の優秀			
②④ 優秀だから	7 (5.07)	6 (4.88)	13 (4.98)
16. 人格が優れている			
②⑤ 尊敬できる人格だから	40 (28.99)	44 (35.77)	84 (32.18)
17. 身体および運動能力が優れている			
②⑥ 外見がきれいだから	2 (1.45)	2 (1.63)	4 (1.53)
②⑦ 体格がよいから	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
②⑧ 運動が上手だから	10 (7.25)	0 (0.00)	10 (3.83)
②⑨ その他	11 (7.97)	12 (9.76)	23 (8.81)
③⑩ 親しい友だちはいない	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)

友人関係様式

教示：あなたはお友達とどのような付き合いをしていますか。また友達づきあいでどんなことを感じていますか？

以下の設問で、あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい

(1) 友達と一緒にいる時でも別々のことをしていることが多い	22 (15.94)	16 (13.01)	38 (14.56)
(2) 一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	53 (38.41)	37 (30.08)	90 (34.48)
(3) 多くの人とつきあうより一人の友達とのつきあいを大事にする	55 (39.86)	47 (38.21)	102 (39.08)
(4) することや話題によって付き合う相手をかえる	56 (40.58)	49 (39.84)	105 (40.23)
(5) 心を打ち明ける	65 (47.10)	83 (67.48)	148 (56.70)
(6) お互いの領分にふみこまない	27 (19.57)	43 (34.96)	70 (26.82)
(7) ウケるようなことをよくする	63 (45.65)	32 (26.02)	95 (36.40)
(8) 突然まじめな話をして友だちをしらけさせない	13 (9.42)	10 (8.13)	23 (8.81)
(9) 相手に甘えすぎない	50 (36.23)	57 (46.34)	107 (41.00)
(10) 相手の言うことに口をはさまない	13 (9.42)	14 (11.38)	27 (10.34)
(11) 互いに傷つけないよう気をつかう	59 (42.75)	46 (37.40)	105 (40.23)
(12) 冗談を言って相手を笑わせる	66 (47.83)	48 (39.02)	114 (43.68)
(13) お互いのプライバシーには入らない	33 (23.91)	30 (24.39)	63 (24.14)
(14) 相手の考えていることに気をつかう	82 (59.42)	76 (61.79)	158 (60.54)
(15) お互いの約束は決してやぶらない	63 (45.65)	71 (57.72)	134 (51.34)
(16) 話題についていけるように気をつけている	25 (18.12)	16 (13.01)	41 (15.71)
(17) 意見や好みがぶつからないよう気をつけている	12 (8.70)	7 (5.69)	19 (7.28)
(18) 自分を犠牲にしても相手につくす	14 (10.14)	8 (6.50)	22 (8.43)
(19) 楽しい雰囲気になるよう気をつかう	61 (44.20)	63 (51.22)	124 (47.51)
(20) あたりさわりのない会話ですませるようにしている	16 (11.59)	9 (7.32)	25 (9.58)
(21) まじめな話題にならないよう気をつけている	2 (1.45)	2 (1.63)	4 (1.53)
(22) みんなで一緒にいることが多い	44 (31.88)	27 (21.95)	71 (27.20)
(23) 真剣な議論をすることがある	61 (44.20)	66 (53.66)	127 (48.66)
(24) 友達から取り残されないよう気をつける	21 (15.22)	11 (8.94)	32 (12.26)
(25) 友達グループ以外の他人とはあまり付き合いたくない	10 (7.25)	2 (1.63)	12 (4.60)
(26) 友達グループのメンバーからどう見られているか気になる	32 (23.19)	28 (22.76)	60 (22.99)
(27) 友達グループのためにならないことは決してしない	5 (3.62)	8 (6.50)	13 (4.98)

ふれあい恐怖状況

教示：次の文章はあなた自身についてどの程度あてはまりますか。

以下の設問について、あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい

(1) 一人でいるのは苦手である	27 (19.57)	25 (20.33)	52 (19.92)
(2) できることなら他人とはあまり関わりたくない	7 (5.07)	8 (6.50)	52 (5.75)
(3) 自分は外見にはあまり気をつかわない	43 (31.16)	17 (13.82)	60 (22.99)
(4) 一人で趣味に没頭しているのが好きだ	43 (31.16)	30 (24.39)	73 (27.97)
(5) 人とつきあうより物と付き合っている方が楽だ	11 (7.97)	7 (5.69)	18 (6.90)
(6) 友達はとくにほしくはない	1 (0.72)	2 (1.63)	3 (1.15)
(7) 友だちと一緒に食事をするのはいやだ	2 (1.45)	2 (1.63)	4 (1.53)
(8) 講義には必ず出席するようにしている	33 (23.91)	34 (27.64)	67 (25.67)
(9) 人と雑談するのは苦手だ	17 (12.32)	6 (4.88)	23 (8.81)
(10) 知り合いに道や廊下で会った時挨拶するのが苦痛だ	21 (15.22)	9 (7.32)	30 (11.49)
(11) 他人といっても話題がなくて困ることが多い	43 (31.16)	21 (17.07)	64 (24.52)
(12) 他人と付き合うと自分の弱みを握られそうな感じがする	16 (11.59)	2 (1.63)	18 (6.90)
(13) 人という場面で言葉がなくなってしーんとしてしまうのが怖い	50 (36.23)	43 (34.96)	93 (35.63)
(14) 他の人は自分を受け入れてくれない	9 (6.52)	6 (4.88)	15 (5.75)
(15) 他人の本音で自分が傷つけられそうな気がする	19 (13.77)	7 (5.69)	26 (9.96)
(16) 人といるとイヤなことを頼まれるので付き合いたくない	5 (3.62)	4 (3.25)	9 (3.45)
(17) 自分の本心を他人に見せたくない	29 (21.01)	20 (16.26)	49 (18.77)
(18) 他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	20 (14.49)	22 (17.89)	42 (16.09)
(19) 人にとけ込むのが苦手だ	42 (30.43)	22 (17.89)	64 (24.52)
(20) 他人と一対一の場面より、数人である方が緊張する	11 (7.97)	13 (10.57)	24 (9.20)
(21) みんなと一緒にいないと不安である	0 (0.00)	3 (2.44)	3 (1.15)

註) ()内のパーセンテージはそれぞれ男女別全回答者に対する比率

示す。

(1) 友人選択理由

“その他”項目への回答数はわずか(23件 8.81%)で、また“親しい友達はいない”への回答も有効回答の中には見られなかったため、両項目を解析の対象から除外した。それぞれの質問について選択されたものを1、選択されないものを0点とし、林の数量化理論Ⅲ類に基づく解析を行い、第Ⅲ軸までを求めた。解釈可能な軸として第Ⅱ軸までを採択した。第Ⅰ軸は物質的關係(+)-心情的關係(-)、第Ⅱ軸は自己の利益になる(+)-相互交流を希求(-)の軸と解釈された(Fig. 1)。さらにカテゴリスコアを第Ⅰ、Ⅱ軸による座標平面での各象限ごとに分類し、第1象限を“自己の利益になる”要因、第2象限を“近接”要因、第3象限を“相手との類似”要因、第4象限を“相手の性格”要

因に基づく友人選択であると解釈した(Fig. 2)。

(2) 友人関係様式

友人選択理由と同様、林の数量化理論Ⅲ類に基づく解析を行った。第Ⅲ軸までを求め、第Ⅰ、Ⅱ軸を解釈の対象とした。その結果、第Ⅰ軸が友人と表面的に関わる(+)-心情的に深く関わる(-)の軸、第Ⅱ軸が個別的関わり(+)-集団的関わり(-)の軸と考えられた。

カテゴリスコアをⅠ、Ⅱ軸の座標軸上にプロットしカテゴリの分布を検討し、3種類の友人関係の様式が見いだされた(Fig. 3)。それぞれの様式は以下の通りである。

1. 相手と距離をおいた付き合い方をする“対人退却傾向”
2. 深刻さを避け楽しさを志向する“群れ志向”
3. 親密さを求め、傷つけないよう気を使う“や

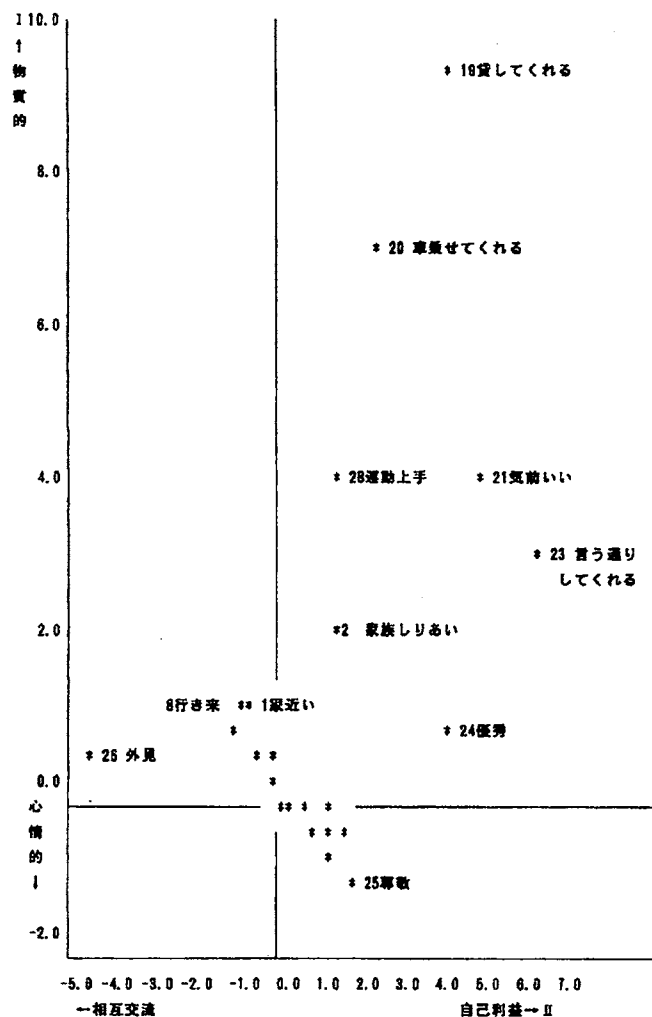


図1 友人選択理由の数量化Ⅲ類 カテゴリウエイトの散布図

【近接】		【自己の利益】	
I			
1 家が近いから		(19物を貸してくれるから)	
3 学校での席や番号が近いから		(20車に乗せてくれるから)	
4 出身学校が一緒だから		(21気前がいいから)	
5 出身地が一緒だから		(28運動が上手だから)	
6 一緒に遊ぶことが多いから		(23自分の言う通りにしてくれるから)	
7 サークルやアルバイトなどが一緒だから			
8 互いの家を行き来することが多いから		15 相手の性格が元気だから	
17面白い相手だから			
【類似】		【相手の性格】	
		II	
9 気が合うから。		10 性格が似ているから	
11趣味や興味が一致するから		12 ものごとへの意見や考え方が一致するから	
		13 相手の性格がやさしいから	
		14 相手の性格が親切だから	
		16 相手の雰囲気が好きだから	
		18 自分の短所やミスを教えてくれるから	
		22 自分のすることを手伝ってくれるから	
		25 尊敬できる人格だから	

図2 友人関係理由 原点付近の各象限での項目 ()内は原点から離れた項目

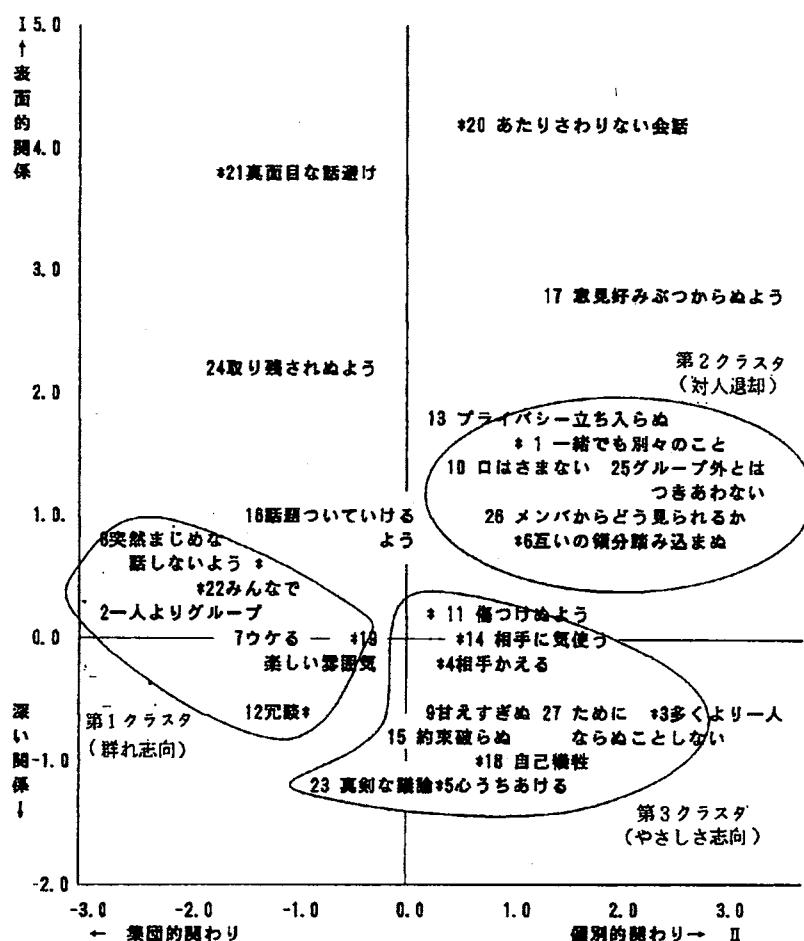


図3 友人関係様式 数量化Ⅲ類 カテゴリウエイトの散布図

さしさ志向”

さらに第Ⅰ軸と第Ⅱ軸のサンプルスコアを変量とするクラス分析(ウォード法)を行い回答者の分類を行った。デンドログラムからクラス内平方和増分0.06を基準としたところ3クラスを得た(図4)。

第1クラスは第Ⅱ軸でのサンプルスコアの平均が小さく、集団志向性が高い群と考えられた。カテゴリスコアの分布の第Ⅰ、Ⅱ軸の座標平面上に本クラスのサンプルスコアの分布を重ねると、“群れ志向”にほぼ相当し、本クラスを“群れ志向群”と命名した。

第2クラスは第Ⅰ軸のサンプルスコアの平均が高く、対人関係の深まりを避ける群と考えられた。第1クラス同様カテゴリスコアの座標平面上にサンプルスコアを重ねて比較したところ“対人

退却”にほぼ重なり、本群を“対人退却群”と命名した。

第3クラスは第Ⅰ軸のサンプルスコアの平均が低く、深い情緒的関わりを持とうとする傾向が強い群と考えられる。またカテゴリスコアとの分布の比較から“やさしさ志向”にほぼ相当し、“やさしさ志向群”と命名した。

各クラスでの男女比は第1クラスが男67名：女57名、第2クラスが男19名：女11名、第3クラスが男52名：女55名であった。2項分布による直接確率を求めたところ、各クラスとも男女比に有意な差は見られなかった(第1クラス0.42、第2クラス：0.20、第3クラス：0.85いずれも両側確率)。各クラス間でのサンプルスコアの平均値(Table2)について、第Ⅰ、第Ⅱ軸別個に一元配置分散分析を行ったところ、いずれ

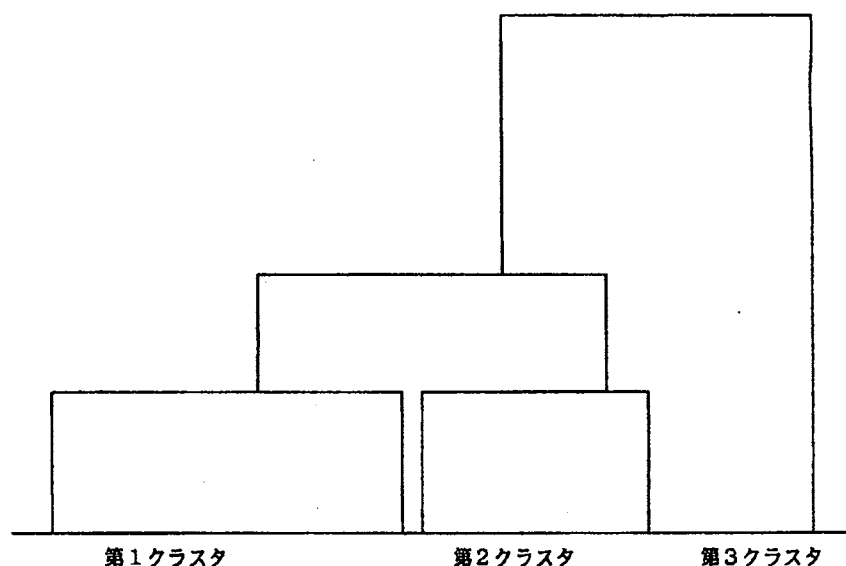


図4 友人関係様式のサンプルスコアを基にしたクラスタ分析のデンドログラム

表2 友人関係様式各クラスタでの各サンプルスコアの平均と標準偏差

クラスタ	1	2	3	分散分析
n	124	30	107	(上段: F, 下段: 多重比較)
友人選択理由				
1軸 平均	0.042	0.116	-0.141	F = 7.68 ($p < 0.01$)
標準偏差	0.446	0.591	0.293	1 = 2 > 3
2軸 平均	-0.063	-0.086	0.016	F = 1.378 n.s.
標準偏差	0.404	0.414	0.407	
友人関係様式				
1軸 平均	-0.152	0.925	-0.248	F = 138.89 ($p < 0.01$)
標準偏差	0.302	0.417	0.377	2 > 1 = 3
2軸 平均	-0.333	-0.012	0.485	F = 191.06 ($p < 0.01$)
標準偏差	0.280	0.442	0.327	1 < 2 < 3
ふれあい恐怖状況				
2軸 平均	-0.075	-0.033	-0.041	F = 0.09 n.s.
標準偏差	0.714	0.689	0.653	
3軸 平均	0.042	-0.006	0.095	F = 0.348 n.s.
標準偏差	0.613	0.428	0.738	

も有意な差が見られた(第Ⅰ軸: $F = 138.90$, $p < 0.01$, 第Ⅱ軸: $F = 191.06$, $p < 0.01$). Newman Keuls 法による多重比較の結果, 第Ⅰ軸では第1, 3クラスタより第2クラスタの値が高く, 第Ⅱ軸では第1 < 第2 < 第3クラスタの関係が見られた。

(3) ふれあい恐怖状況について

問1, 2同様, 林の数量化理論Ⅲ類に基づく解析を行った。その結果, 以下の項目はカテゴリスコアの散布図からみて外れ値と考えられ, これらの項目を削除した上で改めて数量化Ⅲ類による解析を行った。削除項目は以下の通りである。

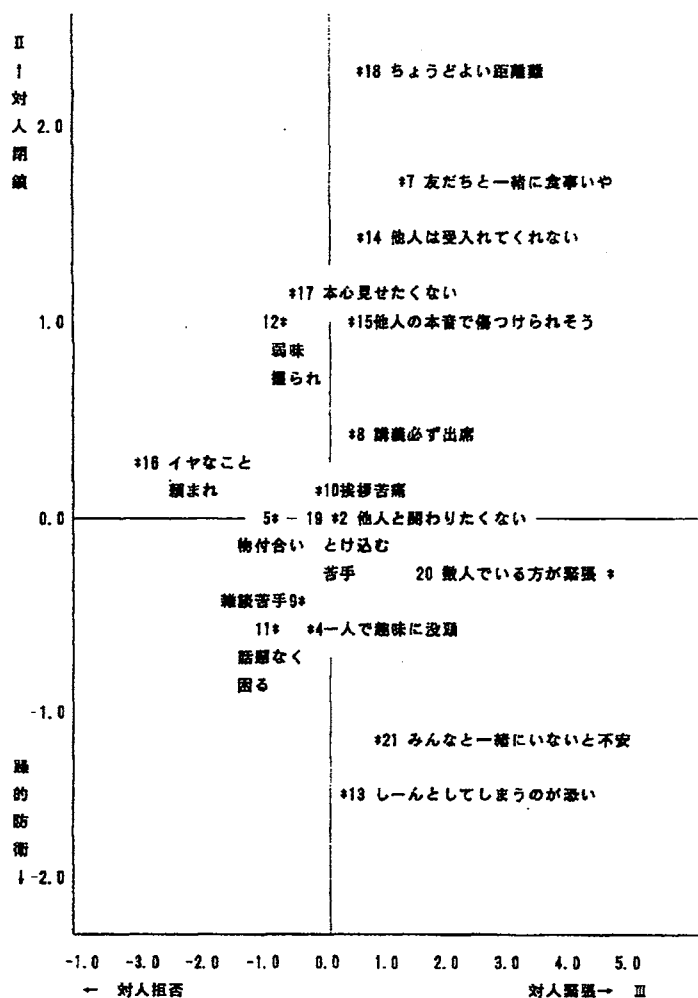


図5 ふれあい恐怖状況 数量化Ⅲ類 カテゴリウエイト散布図

- (1) 一人でいるのは苦手である。
 - (3) 自分は外見にはあまり気をつかわない。
 - (6) 友達はとくにほしくはない。
- 第Ⅲ軸までを求め、解釈可能な軸として第Ⅱ軸、第Ⅲ軸を採択した。第Ⅱ軸は躁的防衛(+)～対人閉鎖(+)の軸と考えられた。第Ⅲ軸は対人拒否(-)～対人緊張(+)の軸と考えられた(図5)。
- (4) 各変数間の関係
- 友人関係様式で分類された各クラスタについて

“友人選択理由”及びふれあい恐怖状況の各軸上のサンプルスコアの平均について1元配置分散分析を行なった。各々の平均と標準偏差はTable 2に示される通りである。

友人選択理由の第Ⅰ、Ⅱ軸のサンプルスコアの平均についてクラスタ間で分散分析の結果、第Ⅰ軸に有意な差($F = 7.68$, $p < 0.01$)が見られ、Newman Keuls 法による多重比較の結果第3クラスタよりも第1、第2クラスタが有意に高いサン

表3 友人関係様式のクラスタと友人選択理由の象限でのクロス表

クラスタ / 象限	1. 利益	2. 近接	3. 類似	4. 性格	χ^2
1. 群れ	13 (10.5)	45 (36.3)	27 (21.8)	39 (31.5)	19.36 $p < 0.01$
2. 退却	3 (10.0)	10 (33.3)	9 (30.0)	8 (26.7)	3.87 n. s.
3. やさしい	8 (7.5)	23 (21.5)	32 (29.9)	44 (41.1)	25.82 $p < 0.01$
計	24 (9.2)	78 (29.9)	68 (26.1)	91 (34.9)	

()内は横%

表4 クラスごとでのふれあい恐怖状況各項目の反応数
(期待値の小さいものは除く)

(1) 一人でいるのは苦手である。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	33 (26.61)	91 (73.39)	$\chi^2 = 6.99 \quad p < 0.1$ 多重比較：3の反応数 > 1の反応数
2 退却	3 (10.00)	27 (90.00)	
3 従来	16 (14.95)	91 (85.05)	

(3) 自分は外見にはあまり気をつかわない。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	22 (17.74)	102 (82.26)	$\chi^2 = 4.353 \quad n.s.$
2 退却	10 (33.33)	20 (66.67)	
3 従来	28 (26.17)	79 (73.83)	

(4) 一人で趣味に没頭しているのが好きだ。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	28 (22.58)	96 (77.42)	$\chi^2 = 5.502 \quad n.s.$
2 退却	13 (43.33)	17 (56.67)	
3 従来	32 (29.91)	75 (70.09)	

(8) 講義には必ず出席するようにしている。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	29 (23.39)	95 (76.61)	$\chi^2 = 0.749 \quad n.s.$
2 退却	9 (30.00)	21 (70.00)	
3 従来	29 (27.10)	78 (72.90)	

(11) 他人といっても話題がなくて困ることが多い。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	17 (13.71)	107 (86.29)	$\chi^2 = 20.030 \quad p < 0.01$ 多重比較：2の反応数 > 1の反応数 3の反応数 > 1の反応数
2 退却	15 (50.00)	15 (50.00)	
3 従来	32 (29.91)	75 (70.09)	

(13) 人という場面で言葉がなくなってしーんとしてしまうのが怖い。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	36 (29.03)	88 (70.97)	$\chi^2 = 10.153 \quad p < 0.05$ 多重比較：2の反応数 > 1の反応数
2 退却	18 (60.00)	12 (40.00)	
3 従来	39 (36.45)	68 (63.55)	

(17) 自分の本心を他人に見せたくない。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	17 (13.71)	107 (86.29)	$\chi^2 = 10.950 \quad p < 0.01$ 多重比較：2の反応数 > 1の反応数
2 退却	12 (40.00)	18 (60.00)	
3 従来	20 (18.69)	87 (81.31)	

(19) 人にとけ込むのが苦手だ。

	反 応 (％)	無反応(％)	
1 群れ	17 (13.71)	107 (86.29)	$\chi^2 = 15.035 \quad p < 0.01$ 多重比較：2の反応数 > 1の反応数
2 退却	11 (36.67)	19 (63.33)	
3 従来	36 (33.64)	71 (66.36)	

ブルスコアを示していた。

ふれあい恐怖状況についてはいずれの軸においても有意な差は見られなかった。

各クラスタごとの、「友人選択理由」各象限の該当数(表3)を求め、クラスタごとに象限間での選択数の差の検定を行ったところ、第1、第3クラスタにおいて有意な差(第1クラスタ $\chi^2 = 19.36$, $p < 0.01$, 第3クラスタ $\chi^2 = 25.82$, $p < 0.01$)がみられた。2項分布による直接確率法による一対比較を行い Ryan 法による多重比較を行ったところ、両クラスタとも、第1象限による選択数が第2、第4象限より $p < 0.05$ で有意に低かった。

「ふれあい恐怖状況」の各項目についての選択数を、クラスタ間で比較した。全21項目中、度数の期待値が小さく検定が困難な項目を除いた8項目について χ^2 検定による比の差の検定を行った。その結果5項目について有意な差が見られた(Table4)。第1クラスタが他のクラスタより選択数が有意に多いのが「一人でいるのは苦手である」、逆に有意に少ないのが「他人といっても話題に困ることが多い」であった。

第2クラスタが他のクラスタに比べ有意に多い項目は「人という場面で言葉がなくなってしーんとしてしまうのが怖い」「自分の本心を他人に見せたくない」「人にとけこむのが苦手だ」の3項目であった。

考 察

(1) 友人関係の特質

現代青年の友人との関わり方として3種類の関わり方が見いだされ、これにはほぼ相当する群が見いだされた。各クラスタの特徴を見ると以下の通りとなる。

第1クラスタ(群れ志向群)は、友人関係場面で深刻さを回避し楽しさを求め、友人といつも一緒にしようとするなどの特徴を持つ。千石(1985)、栗原(1989)などが現代青年の友人関係の特徴として指摘する、群れ的な関係に相当するものと考えられる。ふれあい恐怖状況との関連でも「一人

でいるのは苦手」で「他人といっても話題に困ることが」多くないなど、集団志向性と明るさを示している。

第2クラスタ(対人退却群)は、対人関係の深まりを避けること、他者からの評価を気にすることによって特徴づけられる。これは東京都(1985)、千石(1985)が指摘する、互いに傷つけぬよう友人関係に距離を置いた関わり方をする群と考えられる。

従来、現代青年の友人関係は希薄かつ群れの的であると記述されてきたが、本研究によって、対人的に距離をおく青年と、群れ傾向を示す青年とは、異なる群に属することが見いだされた。

また第2クラスタにおいて「ふれあい恐怖状況」項目の回答数が多い傾向が見られた。本クラスタが、対人関係からの退却傾向を持つことから見て、整合性のある結果と考えられる。「ふれあい恐怖」において困難とされる雑談・会食などの対人場面は、群れ傾向の青年が志向する表面的に明るく盛り上がった関わり方の一端を成すものと考えられる。群れの関わりを持つ青年の場合、表面的には「ふれあった」かのような演技をすることで、ふれあっていない現実から目をそむけるのに対して、ふれあい恐怖青年の場合、形式的関係は可能であっても(山田, 1989)、群れ青年が示すような演技的防衛は困難といえるだろう。

第3クラスタは、心を打ち明け、一人の友人との関係を大切にするなど、従来青年心理学において記述されてきた青年期の友人関係に近い特徴を持っている。本クラスタが全体の中で最大数を占めていることに見られるように、現代青年の友人関係の変容は部分的なものであると考えられる。しかし、この「やさしさ志向」的関わり方には「相手に甘えすぎない」「互いに傷つけないよう気をつかう」「相手の考えていることに気を使う」などの項目を含んでいる。このことは2通り解釈が考えられる。1つは、従来型の青年においても互いの内面に踏み込んで、傷つけあったり、甘えすぎること回避する防衛的友人関係の側面が顕在化しつつあるとするもの。いま1つは菅原

(1989)が述べるように、互いを別個の人格として認めあった上での親密さをこの群が発達させているとするものである。これらの内どちらを妥当とするかについては本研究では十分な資料は得られておらず、今後の課題として残される。

(2) 友人選択基準について

“やさしさ志向群”が他のクラスタに比べ心情的理由による選択をしていることが見いだされた。このことは、第3クラスタが、従来から記述されてきた青年像に近い群であることの裏付けとなろう。また群れ志向群、やさしさ志向群共に、第1象限（自己の利益による友人選択）での該当数が小さいことから、“群れ志向”の青年が、必ずしも功利的な友人選択を行っている訳ではないと考えられる。しかし有意にはならないものの、群れ志向青年が近接の要因に最も多く反応している点で、この群が成熟した友人選択を行うと積極的に述べることもできない。

(3) ふれあい恐怖状況について

ふれあい恐怖状況の項目は、否定的内容の項目によって構成されていたため、該当する項目を選択する方法では反応数が小さくなってしまい、利用できる項目が減ってしまった。そのため“ふれあい恐怖”の様相については十分把握することができなかった。また“おたく”的あり方との関連についても検討できるだけの資料が得られなかった。項目内容・表現の再検討が今後の課題として残された。

引用文献

- Atwater, E. 1992 Adolescence (3rd ed) Prentice Hall. : New Jersey.
- Coleman, J. C. 1980 Friendship and the peer group in adolescence. In Anderson, J. (ed.) Handbook of adolescent psychology. John Wiley & Sons : New York. Pp.409-431.
- 石黒彰二 1951 友人関係の発達—生活場面によるその変動— 児童心理, 5, 828—837.
- 栗原彬 1989 やさしさの存在証明：制度と若者のインターフェイス 東京：新曜社
- 町沢静夫 1992 成熟できない若者たち 東京：講談社
- 松井豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 東京：川島書店 Pp.283-296.
- 中島梓 1991 コミュニケーション不全症候群 東京：筑摩書房
- 中森明夫 1989 僕が「おたく」の名付け親になった事情 別冊宝島 104『おたくの本』 東京：JIC出版 Pp.89-100.
- 岡田努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, 1, 11-18.
- 岡田努 1992 コンピュータにおけるコミュニケーション 心理臨床, 5, 95-99. 星和書店
- 千石保 1985 現代若者論：ポストモラトリウムへの摸索 東京：弘文堂
- 千石保 1991 「まじめ」の崩壊：平成日本の若者たち 東京：サイマル出版会.
- 菅原健介 1989 現代青年の人間関係は希薄か 詫摩武俊・菅原健介・菅原ますみ 羊たちの反乱—現代青少年の心のゆくえ— 東京：福武書店 Pp.37-52.
- 田中熊次郎 1967 児童集団心理学 東京：明治図書
- 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査：対人関係の希薄化との関連から見た分析
- 上野行良・福富護・松井豊・加藤千恵・上瀬由美子・上田康子 1992 高校生の“群れ”志向—現代高校生の生活意識(3)— 日本教育心理学会第34回総会発表 論文集, 237.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 1987 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報)：ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集 23, 2, 206-215.
- 山田和夫 1989 境界例の周辺：サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法 15, 350-360.

要 約

現代青年の友人関係に関する質問紙調査を行った。友人選択理由、友人関係様式、ふれあい恐怖状況に関する質問項目を用いた。友人関係様式について数量化Ⅲ類によるサンプルスコアをクラスタ分析し、群れ志向群、対人退却群、やさしさ志向群の3つのクラスタを得た。群れ志向群とやさしさ志向群は友人選択理由について心情的理由を挙げる比率が高かった。また対人退却群はふれあい恐怖状況を示し易い傾向が見られた。群れ志向の青年と、対人関係に距離を置く青年とが分離されることが見いだされた。

付記

本研究は日本心理学会第56回大会において発表されたものに加筆修正を加えたものである。